

(翻訳) レヴォン・テル・ペトロシアン『アルメニアの古い翻訳文学』

研究ノート

(翻訳) レヴォン・テル・ペトロシアン 『アルメニアの古い翻訳文学』

訳・戸田 聡

訳者はしがき

本稿は上掲書の全訳である。訳出の底本は次のとおり。

Լեւոն Տէր Պետրոսեան (Levon Ter Petrosian), Հայ հին թարգմանական գրականութիւն (Ancient Armenian Translations), New York: St. Vardan Press, 1992 (アルメニア語文と英訳の両方が掲載された本)

1992年は英訳の刊行年を表し、アルメニア語原文は単独で1984年にイエレヴァンで刊行されている。

東方キリスト教圏の一角を成すアルメニアは、同地域の他の諸国或いは諸教会と同様、聖書を始めとする古代ギリシア語のキリスト教関係文献(アルメニアの場合にはこれに加えて、古典シリア語で書かれた文献)を翻訳することを通じて自国語文学を獲得しており、その文学に占める翻訳の意義は非常に大きい⁽¹⁾。その翻訳の歴史を簡潔に論じたのが本訳稿の原本である。翻訳という視点から東方キリスト教文学さらには古代キリスト教文学の研究を進めつつある筆者(戸田)にとって、本稿底本で開陳されている種類の知識は、研究を進める際の前提として有するべきものであり、その意味で筆者自身には訳出の意義は自明だが、のみならず、翻訳文学という形でではあれ、アルメニア語文学が本稿におけるように詳細に我が国に紹介されたことは未だかつてなかったのではあるまいか⁽²⁾。本訳稿公刊の客観的・一般的意義はそのあたりに求められよう。

訳出はアルメニア語原文から行なったが、訳者の語学力の限界のため、原文の意味がとれない箇所については少なからず英訳を参照したことを予めお断わりしておきたい。とはいえ、原文(上掲書は日本アルメニア友好協会が所蔵している)に当たる方がおられれば、訳者が原文をなるべく直訳的に訳したことは一目瞭然のはずである。そしてそういうレベルの訳出なので、全編を通じてもとより誤訳が多々散見されるだろうが、それでもなお、訳文が大意を誤りなく伝えていることを希望する次第である。

なお、諸般の事情により、本稿は跡見学園女子大学『人文学フォーラム』第11号と『コミュニケーション文化』第7号に分割掲載されることとなった。分割掲載に当たっては同大学の倉石あつ子先生のご配慮を賜った。記してお礼の言

葉としたい。

訳文中 □ の部分は訳者による補記を意味する。

* * *

その存在全体の過程において、アルメニアの国民文学には、様々な言語すなわちギリシア語、シリア語、ラテン語、アラビア語から、行なわれた諸々の翻訳が伴ってきた。それら翻訳は、アルメニア文学の発展を確かなものにする最も重要な要因の一つだったのであり、また、[アルメニア文学を養う]養分の主要な源泉の一つだった。中世には少数の翻訳がグルジア語、ペルシア語、古フランス語、トルコ語、エチオピア語、ロシア語、英語、イタリア語、ポーランド語、スペイン語からも行なわれている。

アルメニアでは翻訳の動きは、アルメニア国民の精神的指導者たち、すなわちメスロブ・マシュトツ及びサハク・パルテヴ、による取り組みと効果的な協力とによって、文字の発明（405年）のすぐ後に始まった。諸々の翻訳作品は、アルメニア独自の文学の発展と、アルメニア人の読書の地平の拡大と、アルメニア人の言語の豊富化とに関して、重要な役割を果たした。それらのうちには他の諸国民（まず、自分たちの直接の隣人であるギリシア人やシリア人、またグルジア人、アラブ人、ペルシア人、そしてヨーロッパ人）とのアルメニア国民の文化的関係もまたはっきりと表されている。翻訳によって、古代の哲学・科学・キリスト教神学や、中世の芸術文学や、東方の医学の、すべての重要な達成は、アルメニア社会の財産となったのであり、それらは独自の諸価値の創造のための基礎を成した。

歴史文化的観点から見て、翻訳作品と自国の作品との区別は条件的な意味しか有しない。なぜならそれらは、内容の意味でも形式の意味でも、一体的な文学的事実の等価的な両側面を表しているからである。中世においては、本質的にそれらの相違は全く認識されず、アルメニアの読者によって、自国の著者たちも外国の著者たちも同じ敬意に値した。その証拠は、自国独自の著作と翻訳の著作とを同列に、無差別に載せている幾千ものアルメニアの写本であり、そしてアルメニアの著者の作品だけから成るような集成の写本には、稀にしか出くわすことができない。

東方キリスト教の諸々の文学すべてにおいてと同様、アルメニア文学においても翻訳は自国独自の文学の成立に先立った。しかしながら、翻訳文学から自国独自の文学への移行は、5世紀のアルメニアの現実の中で極めて短い期間に起こっており、それは今日でも研究者たちに驚きの念を生じさせる。翻訳の著作を手がけてから全体で数十年後には、マシュトツ、コリウン、コルブのエズニク、ブザンドのパウストス、アガタンゲロス、エリシェ、ホレンのモヴセス、パルプのラ

ザルといったアルメニアの著者たちの努力によって、貴重かつ独創的な多数の作品が創造された。しかしながら、自国独自の文学の創造によって、翻訳の著作がアルメニアにおいて停止したわけではなく、むしろ、より広範な諸領域を包含することによって、[翻訳文学は] 最近時に至るまで存続したのである。

アルメニアの翻訳文学の時期区分

アルメニアの翻訳文学の歴史は、それ自体1つの連続的な鎖を成しており、無論その鎖は興隆の時期と退潮の時期を有し、それらの時期は文化の一般的発展の諸々の規則性によって条件づけられている。含んでいる作品の性格という点、追求した様々な目的という点、そして翻訳の諸原理という点で、アルメニアの翻訳の開花に関する下記の5つの段階は、確かに互いに異なっている。これら5つの段階への時期区分は、一方で年代的特徴に対する、他方で歴史文化的特徴に対する、考慮を基礎として行なわれた。

- 1 古典的翻訳 (5世紀全体)
- 2 「ギリシア流」学派の翻訳 (5世紀末～8世紀初頭)
- 3 キリキア段階の翻訳 (12～13世紀)
- 4 「ミラル的」(ウニトル的) 環境の翻訳 (14世紀)
- 5 中世後期の翻訳 (17～18世紀)

我々が見るように、この区分は8世紀初頭から11世紀までの時期と、15～18世紀とを無視しており、これらの時期は、翻訳文学の停滞の段階と特徴づけることができる。

古典的段階の翻訳は、始まりつつあるアルメニア文学の一番最初の必要に、また、教会の思想的・典礼的活動及び教育的事業の組織化の確保に、充足を与えた。それゆえ最初のアルメニアの翻訳者たちの努力の中には、このような明確な目的志向性が観察され、ドイツのアルメニア学者F・フィンクの特徴づけによれば、理にあってこれを「文化の伝達の自覚的なプログラム」と呼ぶことができる。そのプログラムは、第1に、聖書を翻訳することを必要とし、それから、典礼上の諸文書、教父的著作群、釈義的・護教的な著作群、諸々の教会史、諸々のカノン、伝記や殉教伝、すなわち、アルメニア人たちの教会の待ったなしの必要を満たすため、また、アルメニアの国民文学の発展のために、不可欠だったところの、キリスト教的知識の全体(聖書的・典礼的・教父的・解釈的・護教的・史的・教会法的・聖人伝的な[知識])を翻訳することを必要としていた。

5世紀から我々に伝わった翻訳上の多くの多様な記念碑は、アルメニア文学の創立者たちが、ビザンツ及びシリアのキリスト教文学の上述のすべての領域から翻訳を実行することによって、自分たちの前に置かれた問題を全く以て遂行した、ということを示している。アルメニアの翻訳文学の古代的・歴史文化的・知的観

点から見て、最も重要な記念碑とは聖書であり、明らかにされているように、これはその最終的な姿を5世紀の30年代に獲得した。アルメニア人民の公的生活のあらゆる領域に浸透することによって、聖書の翻訳は、文学や芸術や科学やさらには民衆的な民話の上に、つまりすべてのアルメニア文化の上に、明確な刻印を刻んだのである。全体として、中世のアルメニアの霊的な詩文、細密画、音楽、及び建築は、その影響を受けている。或る意味で、書道の術の発展もまた、聖書と結びついている。なぜならそれは、中世の最もよく書写され普及した書だったからである。聖書の諸文書はたいがい、大きな修道院に隣接して活動する専門化した書写所で、最良の書写者たちの手で、最も選り抜きの羊皮紙の上に書写されただろう——書道の術の発展に対して積極的な影響を持たずにはいなかった、これはそういう状況である。

聖書の後に、アルメニアの最初の翻訳者たちは、キリスト教の教会の最も重要な著作群、いわゆる聖なる父たちの諸著作を、アルメニア語に訳している。それらを順に挙げることができる。すなわちアレクサンドリアのアタナシオスや、カイサリアのバシレイオスや、ナジアンゾスのグレゴリオスや、エメサのエウセビオスや、シリアのエフレムや、金口ヨアンネス〔ヨアンネス・クリュストモス〕や、ガバラのセウエリヤノスや、アレクサンドリアのキュリロスや、ポントスのエウアグリオスや、エルサレムのキュリロスの、註釈・弁論・カノン、アテネのアリステイデスや、ヒッポリュトスや、キュプロスのエピファニオスの、護教論・論駁の著作、カイサリアのエウセビオスの『教会史』・『クロニコン』（年代記）、アフラハトや、アミダのゼノビオスや、エデッサのアイタツラハーの、講話・文書、マイペルカトのマールーターの殉教伝的集成、また、典礼の書物、例えばバカラガマトイツ『典礼書』、時課の書、典礼朗読用聖書、などである。この簡単な列举は、アルメニアの最初の翻訳者たちの広範な文学的活動と、彼らが創造した宗教的宝庫とについて、何ほどかイメージを描いている。アルメニア独自の文学はこの宝庫の上に建設されたのであり、そしてこの宝庫はこの文学を、その存在の全期間にわたって養ったのである。

5世紀のアルメニア語の翻訳は、主にシリア語とギリシア語という2つの言語から行なわれており、シリア語から行なわれた翻訳の後に、ギリシア語から行なわれた翻訳が続いている——もっとも、それらが含んだ実質の点や量の点で、ギリシア語から行なわれた翻訳のほうが多いのだが。シリア語から行なわれた翻訳とギリシア語から行なわれた翻訳は、言語思考の点で、文体の点で、そして語彙の点で互いに顕著に異なっており、そのゆえに幾人かの研究者たちは5世紀の翻訳文学を、シリア的とギリシア的という2つの学派に分けている。しかしながら、サハク・パルテヴやコルブのエズニクやバルンのヨヴセプその他といった同じ著作家たちが、ギリシア語からもシリア語からも翻訳を行なったという、歴史家たちによって確証された事実は、そういう問題を不要にしている。他方、ギリシア

語とシリア語から行なわれた翻訳の間の顕著な文体上の違いは、異なる翻訳学派の存在によってではなく、2つの言語の若干の特性によって説明される。

古典的段階の主要な翻訳原理は、原文のそのままの、しかし隷従的でない、再現ということだったのであり、これは、アルメニア語の規則に反せずに原文の内容と意味的な陰翳とを正確な仕方では表現する、という可能性をもたらした。5世紀のアルメニアの翻訳は一般に、言語の豊かさと明晰さと、滑らかなかつ洗練された文体とによって際立っている。

文学者たちの多くは、いわゆる黄金時代というアルメニア語の語法によって惑わされた時代によって導かれて、アルメニアの翻訳文学の古典的段階を405～460年という時代の段階で区切っている。しかしながら実際には、古典的性格を担っている翻訳は、5世紀末まで行なわれ続けているだけでなく、ギリシア流学派の翻訳と並行して、後にも存在している可能性が極めて高い。

アルメニアの翻訳文学の発展の**第2段階**においては、教会的な諸著作のそれまで占めていた場を、より理論的（教義的・哲学的）な性格を有する諸著作の翻訳が、占め始めている。それらは、アルメニアの現実の新たな要求、すなわち古代の哲学や科学の達成を会得することの必要、と結びついていた。この段階ではギリシア流学派の努力によって、トラクスのディオニュシオスの『文法論』、アフトニオスの『必要の書 [プロギュムナスマタ]』、アレクサンドリアのテオンの『弁論練習』、フェニキアのボルフェリオスの『アリストテレスの範疇論』、アリストテレスやプラトンの諸著作、新プラトン主義の哲学者たち（イアンブリコスや不敗者ダヴィト）の哲学的註釈書、ニュッサのグレゴリオスやエメサのネメシオスの生理学的諸著作、ユダヤ人フィロンやルグドゥスムのエイレナイオスや猫背のティモテオスやアレオパゴスのディオニュシオスの教義的・神学的著作その他が翻訳された。言及された翻訳作品は、知識の分類の中世的理解のすべての分野——文法、弁論術、哲学、自然学、そして神学——を含んでおり、それらは、ギリシア流学派の代表的人物たちの首尾一貫的かつ意図的な活動について証している。

アルメニア学の中で相当量の仕事が、ギリシア流学派の翻訳の分類と番号づけ [英訳によれば「年代決定」] という方向で行なわれている。以前の研究者たちの基本的な結論を考慮した、哲学史家S・アレヴシャティアンのものである最近の分類は、ギリシア流翻訳の継起に対して次のような画像を提示している。すなわち、第1期：450～480年の年代。第2期：480～510年の年代。第3期：510～600年の年代。第4期：610～710年の年代。ギリシア流学派の古い翻訳だと考えられているのはトラクスのディオニュシオスの『文法論』であり、他方、時間の点で最後のものは、アレオパゴスのディオニュシオスの神学的・哲学的な著作の翻訳である。

文法的・哲学的著作の翻訳の過程で、当然ながら、[ギリシア語の] 諸々の科

学的概念に対応するアルメニア語の等価物を語彙的に想像するという問題が生じた。ギリシア流学派の翻訳者たちはこの問題を人為的な方途で、つまり借用語と新創造の接頭辞との助けによって、解決した。こういうわけで、ギリシア流の諸々の翻訳は、アルメニアの中で古い文化の普及とアルメニアの中世の哲学・科学の発展とを促進しただけでなく、アルメニア語の科学的用語の創造という働きの中でも、重要な役割を演じている。そういう接頭辞とは、例を挙げればսպ, առ, գեր, ենթ, հակ, ստոր, մակ, տար, տրամ, ֆոխ, ներ その他であり（これらは現代アルメニア語の中では極めて普通であり、今日でも科学的造語の本質的な要素を成している）、これらは最初ギリシア流学派の働き手たちによって、ギリシア語との類比によって流布させられたのである。

ギリシア流学派の代表的人物たちは、古典的段階の翻訳者たちとは対照的に、原文の字義的な実質的再現という原則によって導かれており、そのゆえに、彼らが行なった翻訳の中では、不明瞭な文体と、アルメニア語にとって異質な統語的構造とが明白である。しかしながらアルメニア文化は、ギリシア流学派がもたらした積極的な産物を我が物としつつ、時代の経過の中で、そのあらゆる行き過ぎを振り払うことができた。

我々が上で述べたように、8世紀から11世紀までは、アルメニアの翻訳文学の歴史の中で衰退の諸世紀として特徴づけられる。そのことは、この時期から我々に伝わった翻訳の比較的僅かな量によってだけでなく、翻訳の共通の原則・目標の欠如によっても、明白である。それにもかかわらず、これら諸世紀もまた、翻訳文学のいくつかの価値ある作品をもたらししており、それらのうちのいくつかはアルメニア文化の発展の歴史の中で重要な役割を果たしている。9世紀には、シリア人ナナ〔すなわちニシピスのノンノス〕の『ヨハネの福音書の註釈』という著作が、たぶんアラビア語からアルメニア語に翻訳されており、他方10・11世紀には、アトマイ修道院の院長ガギクの手によってシリア語から、マイベルカトのマールーターの生涯が、また、バルディショーやネルセフや無名者の殉教伝が、翻訳されている。10世紀の翻訳の中で言及に値するのは、ダマスコのヨアンネスの『哲学入門』という著作（翻訳者はバグラト・マミコニアン）と、コンスタンティノーブルのヨヴセブが翻訳したビザンツのメノロギオン〔英訳では「シュナクサリオン」〕であり、後者の基礎の上に、のちにアルメニアのメノロギオン〔英訳では「シュナクサリオン」〕の様々な版が構成された。11世紀には、エウクレイデスの『幾何学』やプラトンの『パイドン』や『ティマイオス』といった対話篇をギリシア語からアルメニア語に翻訳することによって、グリゴル・マギストロスが翻訳の領域で顕著な仕事を行なっている。他方、11世紀末～12世紀初頭にはその息子、アルメニアのカトリコスだった「殉教者愛好者」グリゴルが、ギリシア語及びシリア語から数十の聖人伝や殉教伝を翻訳することによって、そしてそれらによってアルメニアの聖人伝の文学を豊かにすることによって、翻

訳の広範な活動を行なっている。

キリキア段階では、古典的翻訳やギリシア流翻訳の場合のように翻訳活動の同じ一貫性や企図された実質を明らかにすることは、難しい。しかしながら、いくつかの特徴の存在が論拠となって、この段階は、[これを] アルメニアの翻訳文学の発展の新たな停泊地として分け隔てることへと与えられた。この段階の最も特徴的な現象は、実際の知識（民法、医学、農業）に関して存在した関心であり、それはキリキア国家の直接の必要に由来していた。それら必要を満たす目的で、12世紀から13世紀にかけて、シリア語・ギリシア語・古フランス語、アラビア語からアルメニア語に訳されたのが、シリア・ローマ法書、ビザンツ法の集成、『アンティオキアの^{アシエズ}法廷』、アブーサイド及び司祭イショーフの（東方の資料の基礎の上に構成された）医学的・生理学的著作、中世の農業知識の百科事典を成している『ゲオボニカ』[英訳による。アルメニア語の直訳は『[農]作業の書』]、シリア人ファラジュの『馬の医書』という獣医学のハンドブックその他である。写本の貴重な奥書きによれば、キリキア王ヘトゥーム1世の命令によって、鑄造や馬の世話や刀づくりや天文学[英訳では「占星術」]が提示された書物が、翻訳された。

古典的段階の諸々の翻訳伝統も、部分的には継続しており、新たな聖人伝や殉教伝や講話や註釈が翻訳された。[殉教者愛好者]グリゴルの仕事を継続することによって、ランプロンのネルセスは、古い翻訳や新しい翻訳の版によって『父たちの生涯』という集成を成しており、また、ギリシア語から教皇グレゴリウスの『イタリアにおいて活動を展開した様々な父たちの生涯について』という同じ著作を翻訳した。ランプロナツィ[ネルセスのこと]はまた、教会の諸々のカノンや、諸々の文書[英訳では「書簡」]や、註釈や、典礼の諸書の一連[の翻訳]や、その他の翻訳も行なっている。12世紀の翻訳文学の領域では、カトリコスだったグリゴル3世パフラヴニやその兄弟ネルセス・シュノルハリも重要な役割を演じた。

シリアの直接的近接性と、キリキアにおけるシリア人住民の存在という状況とは、シリアの文学の数多くの著作の翻訳を促進した。例えば、サルグのヤコブの数十の講話や讃歌、シリア人ミカエルの『年代記』、サラフのダニエルの『詩編註釈』、シリア人エフレムや隠者バルサウマや将軍サルギスの聖人伝や殉教伝がそれである。シリアの文学のいくつかの例はこの時期にはギリシア語からもアルメニア語に翻訳された。例えば、シリア人エフレムの『遺言』や彼の講話のいくつかがそれである。

キリキアでは翻訳活動の新たな仕方が用いられ、その起源は「殉教者愛好者」グリゴルの名と結びつけられている。[この時期の]翻訳はふつつ外国の著者とアルメニアの著者の協働によって行なわれており、すなわち、ギリシア人やシリア人の翻訳者たちが原文の逐語的な翻訳を行ない、他方アルメニア人の編者たち

はそれらの文学的彫琢を行なった。そのゆえに、原文の観点からは、これらアルメニア語訳は往々にしてそれらの底本から相当異なっており、実際それらの自由訳となっている。

キリキア段階の翻訳は他の特殊性によっても顕著であり、[一方で] 教会文学に固有な諸書（聖人伝、殉教伝、講話、註釈）が古典語で訳されたとすれば、他方で、実際のな目的のために意図された翻訳、例えば『アンティオキアの^{アシーズ}法廷』、『ゲオポニカ』、シリア人ファラジュの『馬の医書』、医学の論考やその他[の翻訳]は、民衆に理解可能な中世アルメニア語で行なわれた。

13世紀には、翻訳の仕事の若干の活性化は、大アルメニアの北部の、グルジア人の国家の影響のもとにあった諸地域でも観察された。シメオン・プグンツァハネツィの努力によって、グルジア語からアルメニア語に翻訳されたのが、プロクロス・ディアドコスの『神学的総合』、ダマスコのヨアンネスの『知識の泉』、シナイのヨアンネスの『神的上昇の梯子』といった著作であり、例えばまた、『グルジア人の歴史』や『ギリシアの時課の書』である。しかしながら、グルジアの信仰を持つアルメニア人たちの環境の文学的なこの諸々の生産物は、その性格の点でも、彼らが探求した目的の点でも、キリキアの翻訳とは決定的に異なっており、むしろ次のミアラル的段階の翻訳と結びついている。

ミアラル的環境の翻訳は、アルメニア人の霊的な文化の内的な必要に由来したこれまでの諸段階の翻訳とは異なり、外国人の企てによって、そして外国人の目的に奉仕することへと向けられた[直訳は「呼ばれた」] 諸活動を表している。もちろん、アルメニアのミアラル的運動においてその起源が、政治的な動機、すなわち教皇庁の助けによってアルメニア人民を解放するという空しい夢想、と結びついていたことは否定できない。しかしながら、実際にはミアラル運動は、その目的の実現という方向でいかなる役割をも果たさず、それだけでなく、アルメニア人民の相当な部分の疎外の原因となった。それにもかかわらず、その演じた厳密に否定的な役割にもかかわらず、実際の観点から見ればミアラル的運動は、注目に値するいくつかの足跡を、アルメニアの文化に、特に自然科学的・哲学的アプローチの発展の歴史の中に、残した。

アルメニアにおけるミアラル的運動の文化的中心の中には、アルタズ州のツォルツォル集落に創建されたアルメニア・フランシスコ会修道院と、ナヒジェヴァンのクルナ村のアルメニア・ドミニコ会修道院があり、そこではフラ・ボンツイウス、ボノニア或いはマラガのバルトロメウス、アラゴンのペトルスといったヨーロッパの宣教師たち、及び、ツォルツォルのヨヴァンネス、クルナのヨヴァンネス、クルナのヤコブといったアルメニア人の同輩修道士たちが、激しい宣教的・文学的活動を営んでいた。主としてこの献身の努力によって、非常に短い時間、14世紀の20～40年代に、非常に多数の典礼的・宣教的・神学的・註釈的な書籍や、また例えば一連の哲学的・科学的な労作が、ラテン語からアルメニア語

に訳された。

ミアラル的環境の最も重要な翻訳は、ジルベール・ド・ラ・ボレーの『6つの原理について』、アルベルトゥス・マグヌスの『神学的真理の簡潔な説明』、トマス・アクィナスの『教会的勧告について』、『神学大全』、『諸々の徳の書』、リラのニコラウスの『ヨハネによる福音書註解』と『ヘブライ人〔へ〕の手紙註解』、マラガのバルトロメウスの『6日間の創造について』、『弁証法の簡潔な説明』、『講話の書』、アラゴンのペトルスの『ローマ教会のカノン法典』、『ペリアルメニアスの書の分析』、『ポルフェリオスのイサゴーゲーの簡潔な説明』といった労作その他である。アルメニアのミアラルたちは、ネルセス・バリアネンツィという、自分たちの歴史家を有してもいた。ネルセスは1340年代に、一時的にフランスのアヴィニョン市に定着していたカトリック教会の宗教的中心において、重要な追加としてラテン語からアルメニア語に、ローマ教皇たちの即位の簡潔な歴史であるオパヴァのマルティヌスの『杖の書』を翻訳した。

しかしながら、上で言及した諸々の翻訳は、ミアラル的環境の狭い圏内に停滞してはならず、ほどなくその限界から外に出ることによって、そして哲学的・自然科学的な文学の次なる発展と、アルメニアの中のヨーロッパのスコラ学の炉より以前の古い世界の知識の達成の普及とを促進することによって、アルメニアの諸々の主要な教育的中心地の中に浸透した。特に否定できないのは、アルメニアの哲学のグラツォル・タテヴ学派に対するそれらの有益な影響であり、エサイ・ヌチュヰ、ヨヴハン・ヴォロトゥネヰ、グリゴル・タテヴァヰといつたその精神的リーダーたちは、カトリックの破壊的な考えに対して決定的かつ不屈な戦いを推し進めることによって、ミアラル的環境の文学的・科学文化的な産物を広やかな心で評価し、同時に自らのものとすることができたのである。

15世紀から16世紀までの衰退の時代のあと、アルメニアの翻訳文学はその発展の最後の**中世後期の段階**に入った。17世紀から18世紀まで観察できる、翻訳の仕事の顕著な活性化は、アルメニアの移民たちの活力の増大と、国際交易においてアルメニアの承認が有していた重要な役割と、アルメニアの文化の一般的な興隆とによっていた。アルメニア人民は、翻訳という手段でヨーロッパの学問——地理学、数学、文法、自然科学——の最近の達成に関与することとなった、東洋の諸々の人民の中でたぶん最初の人民だったろう。印刷術の拡大は、向学心ある社会の中にじかに知識を広める可能性をもたらしており、疑いなくそれは、アルメニアの文化の発展と人民の教育水準の向上とを促進した。

17世紀のアルメニアの翻訳文学の領域の中で重要な役割を果たしたのは、アンキュラのヨヴハンネス、ポーランドのステパノス、イエレヴァンのヴォスカン、ヨヴハンネス・ホロヴだった。アンキュラのヨヴハンネスによってアルメニア語に翻訳されたのは、『ラテン語の世界地図』、ペトルス・アピアヌスの『宇宙形状誌』、『プトレマイオスの世界地図』、『諸大陸(?)の歴史』、『身体研究〔英訳で

は『生理学』、『石〔隕石?〕について』といった論考その他である。ポーランドのステパノスの翻訳の中で言及に値するのは、フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ戦史』、アリストテレスの『形而上学』、プロクロス・ディアドコスの『諸原因の書』、アレオパゴスのディオニュシオスの4つの著作（これらは既に1度、8世紀の初めにステパノス・シヴネツィによってギリシア語からアルメニア語に翻訳されてあった）であり、また例えば『命の鏡』という集成である。注目に値するのは、ラテン語から行なわれたポーランドのステパノスの他の翻訳と異なり、『命の鏡』という集成はポーランド語版からアルメニア語に翻訳されている、ということである。イエレヴァンのヴォスカンがラテン語からアルメニア語に翻訳したのは、『文法術』、『論理の諸要素』といった著作、哲学の辞書、また例えば（1666年に彼自身が手がけた聖書の出版を補完するための）聖書のいくつかの書である。ヨヴハンネス・ホロヴの重要な翻訳は、『ダビデの詩編の解説』、『霊の庭』、『諸々の力〔英訳では「徳」〕の新たな花』、トマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』、ジャン・バティスタ・デッラ・ポルタの『人相学の書』といった著作である。1675年にマルセイユのヴォスカン出版社で刊行された『計算〔或いは会計?〕の仕事』という本の翻訳も、彼に帰せられている。17世紀の末にアムステルダムで活動したヴァナデツィー族の出版社が刊行した書物の相当部分も、或る意味で翻訳、より正確には置換、だとみなされるべきである。

18世紀の翻訳活動は、主に2つの都市、すなわちヴェネツィア（ここではメヒタリストたる父たちが偉大な文学的・文化的活動を行っていた）と、コンスタンティノーブル（ここでは、カトリックのアルメニア人たちの環境の中でも、アルメニアの総主教座の支援のもとでも、広範な教育的・啓蒙的な計画が実現されつつあった）に集中していた。世紀末には数多くの翻訳著作が、アルメニア語出版の他の中心地（トリエステ、マドラス、ベテルブルク、新ナヒチェヴァン〔或いは「ドン川沿いのナヒチェヴァン」〕）でも刊行された。18世紀の翻訳者の中で言及に値するのは、セバステイアのムヒタル、ティフリス〔トビリシ〕のペトロス、ホヴナン・トハテツィ、ペトロス・ムフビアン、アタナス・メラシアン、グーカス〔ルーカス〕・ハルベルダツィ、ヴルタネス・アスケリアン、マルガル・シャフリマニアンその他である。アルメニアの古い印刷の本のどの文献目録によっても、[上で]言及した（及びそれ以外の）翻訳者たちが行なった文学的活動について、何らかのイメージを得ることができるのであり、それゆえ、彼らが出版した多くの翻訳著作をここで一々列挙することは不要である。ただ、次のことを指摘することは必要である。すなわち、17世紀そして特に18世紀に、科学的・実際の文学のかたわらで、宗教的・教義的な性格を有するアルメニア語の翻訳は大きな場所を占めたのであり、それら翻訳は、ヨーロッパの説教者たちや、カトリックになったアルメニア人たちによって、アルメニア社会の中でカトリック的な考えを広めるという目的のもとに行なわれていた。

以上言及した翻訳文学の開花の5つの段階のどれも、我々が見てきたように、アルメニア文学の歴史の中で、程度差はあれその発展の進路に影響を及ぼすことによって、また、アルメニアの読者の知識の宝庫を多様な仕方でも豊富化することによって、何らかの足跡を残している。

翻訳者たち

アルメニアの教会で翻訳者たちが、10月の間に彼らの記念の日を祝うことによって聖人とされていることは有名であり、その日はずっと昔から国の祝日になっている。これ以前のページ[での記述]から容易に推測できるのは、どういう巨大な努力のおかげで、彼らがそういう名誉に値する者たちとなったか、ということである。特に5世紀の翻訳者たちが、文化的奉仕に加えて、アルメニアの教会の独立の確保とアルメニア人民の国民的性格の維持という観点から見て、より一層決定的な役割を果たしたという事実は、中世において明らかに受容されている。アルメニア人民の精神的指導者たちがアルメニア文字を創造しなかったなら、そしてその恩恵によって聖書や必要な典礼文学を翻訳しなかったなら、教会には、4世紀に行なわれていたのと同様に、自分たちの儀式を外国語(ギリシア語或いはシリア語)で行なうことが強いられただろう。そしてはや、アルメニア人民が自分たちの政府を失っていた新たな状況の中では、それは国民的独立の維持という道に対して致命的な危険たりえただろう。文字の発明と、聖書の翻訳と、そしてアルメニア語[で]の教会の儀式とによって、国民的文化の創造のための、また、続く世紀の致命的な動揺に耐えるための、基盤が用意されたのである。

アルメニアの教会の中には、文字の発明の前にも、たぶん4世紀初頭、アルメニアのキリスト教化の直後に、翻訳者の集団が存在を有していただろう。彼らの務めは、ギリシア語やシリア語で行なわれる教会の儀式を口頭での仕方でもアルメニア語に翻訳し、人々に示すことだった。この翻訳は当然、原文の正確な再現ではなく説明・註釈の、性格を帯びていた。それゆえ、アルメニアの文学の中で「翻訳者」や「翻訳する」といった語がしばしば「註釈者」や「註釈する」といった意味でも使われるのは、驚くべきことでない。

アルメニア文字の発明ののち、翻訳者たちの教会的集団は自らのかつての意義を失い、新たな諸条件に応じて再編された。以前の翻訳者たちは条件によって自分たちの仕事の仕方を変え、文書での翻訳に移った。既に、既存の翻訳者たちの存在が、文字の発明の直後に、大規模な計画の実現を企てることへの可能性を与えた。その目的のために、マシュトツとサハクは自分たちの弟子の幾人かを当時のギリシア・シリア文化の諸々の有名な中心地(エデッサ、コンスタンティノープル、アレクサンドリア)に送った。以下、例えば、2人の異なる翻訳者のエデッサ・ビュザンティオンへの派遣をコリウンが描いているとおりである。「次のこ

とが起こった——と彼は書いている——、すなわち、彼ら（マシュトツとサハク）が自分たちの弟子たちの中から2人の兄弟、つまり（我々が上で言及した）ヨヴセプ、そしてもう1人、エズニクという名の者（アイラトの州のコルブ村の出）を、シリア人の側、エデッサ市に送った。シリア人たちの聖なる父たちの伝承を彼らがシリア語からアルメニア語に変換して記すためである。自分たちの派遣先である同地に着いて、翻訳者たちは彼らの指示を実行し、敬うべき父たちに「自分たちの訳業を」送り、（そして彼ら自身は）移ってギリシアの側に行き、そこで学びかつ習熟して、ギリシア語からの翻訳者に任命された」。ビュザンティオンではもう2人の翻訳者、すなわちコリウン自身ともう1人、ゲヴォンドという名の者が、彼らに合流した。自分たちに託された仕事を果たして、この4人の翻訳者たちは、自分たちの翻訳と多くのギリシア語原文とを携えてアルメニアに戻り、翻訳作業を続けた。

翻訳の仕事を目的として行なわれたこれらの旅は、一連の必要な諸事情によって促されたものだった。シリア・ギリシアの宗教的中心の豊かな図書館は、比較的多くの文学的著作を一度に計画的な仕方で翻訳する可能性をもたらした。特に、そういう仕事「の仕方」は、実質的な費用や時間の節約の観点から見て、外国語の原文の高価な羊皮紙写本を注文または書写し、それらをアルメニアに運んで、今や単にそれらの翻訳を行なう、というよりも有利だった。この「後者の」場合の翻訳は、かの枢要な助け——我々の考えではこれは、アルメニアの古い翻訳の高い水準を確保するという観点から見て、重要な役割を果たしていた——を欠いてもいた。中世においては、2か国語辞典（今日の文化的相互理解はこれ抜きには想像しがたい）が存在しなかったことは明白である。したがって、アルメニアの翻訳者たちは、ギリシア語或いはシリア語をいかに良く会得していても、相変わらず、翻訳の過程で——外国語の原文の難解な表現や、曖昧な或いは理解不能な単語を翻訳する過程で——解消不能な困難の前でしばしば止まらねばならなかった。これら困難を克服する唯一の手段は、生きた辞書、すなわちギリシアやシリアの先生ヴァルダベトの助けであり、それを受けることは、当然ながら彼らの環境の中でこそ可能だった。したがって、エズニクやヨヴセプやコリウンやゲヴォンドの旅のあと、5世紀に、今度はアレクサンドリアに向けて、翻訳者たちの別の集団が組織された。歴史の父モヴセス・ホレナツィも彼らの1人だった。たぶん、ギリシア流学派の代表者たちも翻訳作業の同じ方法で働いただろう。彼らは、明らかに自分たちの教育をコンスタンティノーブルやアテネやアンティオキアやアレクサンドリアで受けている、そのごとくに、明らかにこれら都市で自分たちの翻訳を行なっただろう。

翻訳文学の開花の次の2つの段階（キリキア段階とミアラルの段階）には、アルメニアの翻訳者たちの活動の中で本質的な変化が起こった。周知のように、キリキアではアルメニア人のそばに相当の数でギリシア人とシリア人が生活し、そ

の中の多くの人々が、時の経つ中でアルメニア語を習得することによって、アルメニア人たちの文化生活の中に次第に浸透していった。この現象は、翻訳活動の重荷の一部をギリシア人やシリア人たる翻訳者たちの肩の上に置くという可能性を創り出した。彼ら〔翻訳者たち〕はたいがいギリシア語やシリア語の原文の逐語的なアルメニア語訳を行ない、それら翻訳はその後アルメニア人たる編者たちによって修正され彫琢された。相応にも、編者たちの集団の一部を成すのは、「殉教者愛好者」グリゴル、ネルセス・シュノルハリ、ランプロンのネルセス、ヴァルダン・アレヴェルツィ、そしてその他の人々といった、当時のアルメニアの宗教生活の最大の代表者たちである。アルメニア人と外国人の翻訳者たちのこういう協働を証する証言は、数多くの写本の奥書きの中に存在する。例えば、将軍サルギスの殉教伝の奥書きでこう指摘されている。「この講話はシリア人聖職者である司祭ミカエルの手によってシリア語からアルメニア語に翻訳され、そして可能な程度において、アルメニア人のカトリコスたるグリゴリスの兄弟である主教ネルセスの編集によって我々の言語へと合わせられた。アルメニア人の第607年(1158年)」。シリア人ミカエルの『年代記』のアルメニア語訳の奥書きの中で、13世紀の歴史家ヴァルダン・アレヴェルツィは次のように述べている。「神の永遠なる御子の到来の第1248年、アルメニア人の第697年に、本書はシリア語からアルメニア語に……敬虔な司祭イショフによって翻訳された。彼は医術の技芸を習得しており、彼にはイエスが、彼の仕事に対して報いてくださるだろう。私こと、苦しむ魂、自らの能力の程度に応じて本書に対して努力を払ったヴァルダベトたるヴァルダンもまた、神の慈悲を信じ期待する権利を有する」、等々。

ミアラルの環境の翻訳も同じ方法で行なわれた。アルメニアで働くヨーロッパの宣教師たちは、当然ながら、ラテン語からまともなレベルの翻訳を行なえるほどに良くアルメニア語を習得してはいなかった。そしてこの問題の中で、彼らの大いなる助けを成したのが、アルメニア人のミアラル・ヴァルダベトたちである。ツォルツォルのアルメニア・フランスの共同体の中で、ヨーロッパの宣教師ボンツィウス^{フラ}師と、アルメニア人同輩のヴァルダベトたるイスライエルは、共同の仕事によって多くの翻訳を行なっている。クルナのミアラルの中心地で多産な活動を行なったのは、一方で、マラガのバルトロメウス、アラゴンのペトロスといったドミニコ会の修道士たちであり、他方で、クルナのヨヴハンネス、クルナのヤコブといったアルメニア人ヴァルダベトたちである。相応にも、クルナのヨヴハンネスとバルトロメウスとの協働の最初の段階——後者がマラガにおり、まだアルメニア語を習得していなかった時——では、ペルシア人の翻訳者の媒介に頼ることすらやむをえないことだった。例示のために言えば、この仕方ではアルメニア語に翻訳されたのが、トマス・アクィナスの『教会的勧告について』という著作や、数多くのその他の文章である。キリキヤ段階の翻訳者たちと同様、ミアラルの段階の翻訳者たちは同じ仕方では、自分たちの翻訳に付された奥書きの中で翻訳

の仕事に関するデータを与えている。例えば、アラゴンのペトロスとクルナのヤコブが翻訳した『異端者たちに反対して』という著作には次のデータが付された。「クルナの修道院でペトロス師の手によって、及びヤコブス師の媒介によって、翻訳された」。

しかしながら、様々な国の翻訳者たちの協働というこの現象を、アルメニアの文化の特殊性とみなすべきではない。なぜなら、同じ現象は他の諸々の人民の宗教生活でも見られるからである。例えば12世紀にスペインで、アラビア〔語〕の哲学的・自然科学的著作の翻訳の関連で、ヨーロッパの中で哲学・科学の後代の発展のために豊穡な土壌を準備することによって、広範な文学的活動を成し遂げたのは、アラビア語を習得した（主にユダヤ人の）学者たちと、ラテン語を習得したヨーロッパのヴァルダベトたちである。

観察されるように、11世紀から14世紀までのアルメニアの諸々の翻訳の状況に対して十分な光を注いでくれるのは、それらに付された簡潔或いは詳細な奥書きであり、残念ながら古い段階の翻訳にはそういう奥書きがない。奥書きは、翻訳の底本や年代や翻訳者の個性や国籍について重要なデータを伝えているだけでなく、時には、翻訳の過程で生じた困難やその克服のために払われた努力についても説明している。11世紀から12世紀までの翻訳の奥書きや同時代人たちの証言から特に明らかなのは、疲れを知らない翻訳者、「殉教者愛好者」グリゴルの突出したイメージであり、13世紀の或る史料の中では、彼の翻訳活動は次のような言葉で評価されている。「彼は今一度、聖なる照明者〔グリゴル〕や聖なる翻訳者サハク及びメスロブと同様に、アルメニア教会を照らし明るくした。なぜなら彼は、翻訳の能力を有したことによって、あらゆる国々の書物を吟味し、我々の言語の中で欠けていた諸々の良いものを自ら、或いは能力のある他の人々の助けによって、熱心に翻訳したからである」。

キラコス・ガンザケツィの『歴史』という、13世紀の別の史料は、「殉教者愛好者」グリゴルを「賢明かつ有徳な人」と称することで讃えている。「この喜ばしき師父は、殉教〔伝〕的な、また賞賛的な、数多くの著作をギリシア語・シリア語から翻訳している」。彼の翻訳活動はアルメニアの中世の詩——例えばネルセス・シュノルハリの『ヴィパサヌティウン』という詩——の中にも反響を見いだしている。

第2のメスロブとして我々の前に登場し、
多くの書を翻訳し、
——ギリシア語やシリア語から——
聖人たちの講話を〔アルメニア語に〕移し替え、……

「殉教者愛好者」グリゴルの重要な翻訳活動の雄弁な証言は、ネルセス・シュ

ノルハリの『伝記』の中で描かれた、彼の人生における次のエピソードである。公式の訪問でコンスタンティノープルに到着して、グリゴルはこの機会を利用して、ビザンツ皇帝と首都の総主教から、若干の間町にとどまって同所の手写本を調べる特権を求めた。皇帝と総主教は、彼が例外なくすべての写本を使用する特権を与えただけでなく、アルメニアのカトリコスとその同行者たちとに、生活の費用と宮廷の一角とをあてがうことを決定した。グリゴルは直ちに仕事にとりかかり、そして短い時間の間に、数多くの聖人伝や殉教伝や、宗教的祝祭の〔際に〕語られる講話、教父たちの多数の著作、その他を、ギリシア語からアルメニア語に翻訳した。それら翻訳を彼は、彼とともにいた有能かつ賢明な書写者・編者たちに与え、彼らは、アルメニア語の規準と弁論術の要求とに従って編集を行なった。自らの計画を完成してから、グリゴルは、翻訳した写本を首都から外へ持ち出すのをギリシア人たちは禁止するだろうと疑念をいだき、そこで、翻訳された本を携えた同行者たちを密かにパレスティナに送り出した。数日後、彼は皇帝に暇乞いをし、彼らの後を追った。〔以上〕我々が見たように、翻訳された写本を救い出すべく、「殉教者愛好者」グリゴルは、疑いなく何らかの理由で疑念をいだき、狡知を使うことを余儀なくされたのである。

また、「殉教者愛好者」グリゴルだけでなく、アルメニアの他の翻訳者たちも自分たちの文学的仕事の過程でしばしば数多くの困難に出くわしており、そして大いなる努力でそれらを克服できた。カイサリアのアレタスの『ヨハネの黙示録註解』のアルメニア語版の奥書きの中で、ランプロンのネルセスは、同書の翻訳の際に彼が払った大いなる努力と労多き探求とを描写している。「ヨハネの黙示録を読んで」と彼は書いている、「霊的に私は不安になった。なぜなら、驚くべき諸々の言葉の分析を私は知らなかったからである。そしてここかしこで摘み回っても、私は我々の言語でその註解を見つけなかった。さて私はたまたま偉大な町アンティオキアに行き、自分の心の中でこの願いによって燃えて、同所のギリシアやフランクの修道院を回った。そして探求して、この町の有名な聖パウロス修道院の蔵書の中で、ロンバルディアの言葉とフランク人が使っていた文字とで2人の註釈者が著した黙示録註解を見つけた。そして翻訳されたものを願って、その言語からアルメニア語に訳すことができる人を私は見つけなかった。それゆえ、町から私は、北方の山地にあるギリシアの修道院の1つ（ベティアスと呼ばれていた）に行った。そして私は私の願っていたものを、すなわちギリシア語とギリシア文字で〔書かれ〕、正確でちゃんとしており、封印（その町の総主教アタナスのものだった）がしてあるのを、バシルという名の独居する隠者のもとで見いだした。そして、親切な人から嘆願によって求めて本を得、私は、師父ハイラベトの住まい、すなわちカトリコスたる我が主人、聖グリゴリスのもとへ急いだ。後者〔グリゴリス〕はこれについて知ると過度に喜び、聖師父の後援のもと、そこに生活していたヒエラポリスの大主教コンスタンティノスの助けによって翻訳す

るよう指示した。そして神と聖なる主人との助けによって、彼は翻訳し始め、私は書き始め、これによって我々は、アルメニア教会の、学びを愛する子らに、この驚くべき神的な黙示録註解を提示したのである」。

続く諸世紀に、アルメニアの翻訳者たちの仕事の性格は本質的な変化を今一度経験した。翻訳作業が根本的にアルメニア人の移住先（特にアルメニアの印刷術の中心地）に広まり、そして、当時の有名な印刷業者たちはたいてい翻訳者の役割を果たしたのである。異国の環境の中で生活することによって、彼らは容易に地元の言語を習得し、はや大部分、自分たちの翻訳を外国人の編集者の助けなしに行なっている。さらに、中世の末期には、アルメニアの翻訳者たちは外国語からアルメニア語にだけでなく、アルメニア人民の生活の新たな諸条件に応じて逆方向にも、翻訳を行なっていた。

17世紀から18世紀まで、アルメニア人の移住先、特にアナトリアやポーランドやクリミアの諸都市の、アルメニア住民の相当部分は、自分たちの母語を忘れ、日常の仕事の中でトルコ語やキプチャク語を使っていた。こういうわけで、上述の諸々の移住先のアルメニア住民を疎外から救うべく、アルメニア人民の宗教的リーダーたちは宗教的・世俗的な重要な諸著作——アルメニアの植民地の国民的・宗教的生活が存続しうるためになくなくてはならない諸著作——を、アルメニア語からトルコ語やキプチャク語に翻訳することを余儀なくされた。こうしてそのうちに、アルメニアの文字で書き記されたトルコ語文学・キプチャク語文学が創造され、これはアルメニアの不可分の文化的一分枝となった。トルコ語やキプチャク語に訳されたのは、本質的にアルメニアの文学の著作〔であるところの著作〕だけでなく、何世紀もの間に他の諸言語からアルメニア語に訳されアルメニアの文学の本質的な一要素となっていたものもそうである。アルメニア文字のトルコ語・キプチャク語文学のほかに、我々はアルメニアの写本の中に、多くない数でだが、アルメニア文字のラテン語・ペルシア語・アラビア語・ギリシア語・シリア語・ロシア語・ポーランド語・ハンガリー語の文章をも見いだす。他方、アラビア文字やギリシア文字やシリア文字で書き記されたアルメニア語の文章も時折出来^しる。

18世紀から19世紀までの間、ヨーロッパの中では東方の諸々の人民に対する多大な関心が創出され、それらの中にはアルメニア人民の文化に関するものもあった。アルメニア出身や外国人のアルメニア学者たちの努力によって、ラテン語・フランス語・イタリア語・英語・ロシア語・ドイツ語に、アルメニア文学の最も重要な諸々の著作——モヴセス・ホレナツィや、アガタンゲロスや、ブザンドのパヴロスや、エリシェや、セベオスや、ヨヴハン・マミコネアンや、ヨヴハンネス・ドラスハナケルトゥツィや、アリストタケス・ラストイヴェルタツィや、マテオス・ウルハイェツィの『歴史』、ヨヴハン・マンダクニやヨヴハンネス・オヅネツィの講話や教義的諸著作、ネルセス・シュノルハリの韻文詩、その他

——が翻訳された。しかしながら、これら翻訳はその性格の点で中世の諸々の翻訳と根底的に異なっていた。なぜならそれらは、純粋に認知的・学問的な目的を追求したものだったからである。(続く)

註

- (1) 実際この点はアルメニア人自身も意識しており、そのため翻訳の研究は古くから行なわれている。その1例がG. ZARBHANALEAN, *Catalogue des anciennes traductions arméniennes (siècles IV - XIII)*, Venise: Mékhitharistes, 1889 (本文はアルメニア語) である。
- (2) なお、アルメニア文学一般に関しては、中島偉晴、メラニア・バクダサリヤン編『アルメニアを知るための65章』、明石書店、2009年、の第43～44、51～52章に紹介が見られる。